

池尻古墳群の群構造とその性格

水 野 正 好*

Structure and Characteristics of the Ikejiri tomb-group

Masayoshi Mizuno

(1980年9月30日受理)

兵庫県加古川市に所在する池尻古墳群は、加古川工業用水ダム—平荘湖の建設に係わる昭和37年より昭和40年に及ぶ発掘調査によって全容が明きらかにされた古墳時代後期の古墳群である。調査は東洋大学附属姫路高等学校の上田哲也氏を中心に加古川市教育委員会が実施し、すでに成果は昭和40年に『印南野—その考古学的研究—1』として、また『印南野—その考古学的研究—2』として昭和44年公刊されている。この調査により把握された古墳は、全て横穴式石室を埋葬施設とした円墳であり、8基を算え、この全基が発掘調査されたのである。従前、1古墳群の全てを発掘調査した例は少いだけに古墳時代後期の群集墳を考える上で極めて重要な視座を提示するものと考えられたのである。私は、先に兵庫県内の群集墳の構造と性格を窺うために、宝塚市に所在する雲雀山古墳群、小野市に所在する中番古墳群について分析し、その成果を公表して来たが、池尻古墳群についても一応の分析を私案として用意するところがあった。ところが、本年、兵庫県労働部では、この平荘湖の北岸、池尻古墳群の調査済地の北にC・S・R（カルチュア・スポーツ・リクリエーション）計画に基づき施設の建設を計画し用地を取得し、兵庫県教育委員会に古墳の有無について照会するところがあった。県教育委員会では現地を踏査したところ、従前に発掘調査された8基の北に新しく4基の古墳を発見、その取扱について協議を重ねてこられた。結果、内2基については発掘調査を実施することとし、兵庫県教育委員会が調査主体となり奈良大学がこれを援助することとなった。調査中、新しく隣接地から1基の古墳を発見し、文化庁とも協議し、この1基をも調査することとし、結局3基の発掘調査が実施された。結局、池尻古墳群は13基からなる古墳群であり、内11基が発掘調査され、2基が調査されていない現況となった。今回の調査の成果をも含め、池尻古墳群の構造とその性格を検討することとした。

1. 池尻古墳群の概要

池尻古墳群は、従前、種々の名称でよばれているが、一応「池尻古墳群」の名で統一しておきたい。また、従前の調査が池尻古墳群だけではなく、加古川工業用水ダム—平荘湖用地内の古墳全てを対象としたこともあり、用地内で通し番号で編号され、本古墳群の各基は第5～12号墳と呼ばれている。本稿では、池尻古墳群のみをとり上げることとしているので、再度編号することとし第5号墳を第1号古墳とし、第6号墳を第2号古墳、第8

* 考古学研究室

号墳を第3号古墳、第7号墳を第4号古墳、第10号墳を第5号古墳、第9号墳を第6号古墳、第12号墳を第7号古墳、第11号墳を第8号古墳と改号するとともに、今回調査した3基中最も低い位置を占める古墳を第9号古墳、中央の古墳を第10号古墳、最高位にある古墳を第11号古墳と名付けることとしたい。こうした再編番号に従って各古墳の個々の姿を記述することとしよう。

第1号古墳：古墳群東端に位置し南面する横穴式石室を持つ。石室は全長7.92m、玄室4m、幅2.05mをはかる。両袖の制をとり左袖（玄室から羨道を見て）が大きく右袖が小さい。両袖部に供献用土器が集中し、また奥壁隅に馬具、一方に銚鏃が見られた。奥壁石材は1石、袖石も幅広い巨材を使用する。

第2号古墳：第1号古墳の西15mに位置し南面する横穴式石室をもつ。石室は全長7.95m、玄室長3.52m、幅は奥壁で1.95m、中央で2.11m。両袖式の制をとるが左袖の出が大で右袖は小さい。原位置を留める遺品は見られないようである。奥壁は1石を用い、袖石も幅広い巨材を使用している。

第3号古墳：第2号墳の西50mに位置する。墳丘は径25m、高さ3.8m。南面する横穴式石室をもつ。石室全長8.17m、玄室長さ3.95m、幅は奥壁で1.87m、袖境で2.22mを測る。両袖の制をとり左袖の出が大で右は小さい。原位置をとどめる遺物はないが耳飾り数から4人以上の埋葬が知られる。奥壁は1材を継石し、袖石材は細く短い。

第4号古墳：第3号古墳の東20mに位置する。墳丘は小さく径6m、高さ0.4m、東面する横穴式石室をもつ。石室は全長4.74m、幅は奥壁で0.92m。無袖の制をとるが玄室は側壁用材が大きく羨道は小さい。右側壁に直刀と須恵器が原位置であり2体以上の埋葬が推定されている。

第5号古墳：第3号古墳の西に位置する。南面する横穴式石室をもつ。石室は全長7.05m、玄室は長さ3.45m、幅は奥壁で1.8m、中央で2mを測る。両袖式の制をとり、右袖の出が大きく左袖は小さい。奥壁の須恵器、銚鏃から確実な1棺があるが他は攪乱で確めえない。奥壁は1材でなり、袖石は細く短い材を用いる。

第6号古墳：第3号古墳の東北20mに位置し、墳丘をとどめない。東面する横穴式石室をもつ。石室は無袖の制をとり、全長4.92m、幅1.09mを測る。石室中央に仕切石を設け石室を2分する。追葬が考えられている。奥壁は1材に他の1材で横継ぎしている。

第1表 池尻古墳群概要表

項目 新編号	『印南野』 旧号	占 地 尾根・群名	石 室				
			石室型式	全 長	玄室長	玄室幅	石室軸
第1号古墳	第5号墳	第1尾根第1群	両袖—a	7.92	4.00	2.05	南面
第2号古墳	第6号墳	〃	両袖—b	7.95	3.52	1.95	南面
第3号古墳	第8号墳	第2尾根第1群	両袖—a	8.17	3.95	1.87	南面
第4号古墳	第7号墳	〃	無袖	4.75	—	0.92	東面
第5号古墳	第10号墳	第3尾根第1群	両袖—b	7.05	3.45	1.80	南面
第6号古墳	第9号墳	〃	無袖	4.92	—	1.09	東面
第7号古墳	第12号墳	第4尾根第1群	両袖—a	6.83	2.71	1.80	南面
第8号古墳	第11号墳	〃	片袖—a	7.74	3.48	1.65	南面
第9号古墳	今回調査	第4尾根第2群	片袖—a	7.50	3.60	1.70	西面
第10号古墳		〃	片袖—b	8.00	3.00	1.60	南面
第11号古墳		〃	無袖	4.90	—	0.90	西面

第7号古墳：本古墳群最西端の古墳である。南面する横穴式石室をもつ。石室全長6.83m、玄室の長さ2.71m、幅1.8mをはかる。羨道は2段になり奥部は長さ2.40m、幅1.32m、入口部は2次的増設とされる。石室は両袖の制をとり右袖の出が大きく左は小さい。奥壁隅で須恵器、玄室袖部で耳飾を発見し1～2体の埋葬は確実である。奥壁は巨材をたて他の1石を横継ぎし、袖石は細く短い材が使用されている。

第8号古墳：第7号古墳の東15mに位置し、墳丘径15m、南面する横穴式石室をもつ。石室は全長7.74m、玄室の長さは3.48m、幅は奥壁で1.65mを測る。片袖式を制をとり右側壁に袖を見る。報告書では両袖式とし両側壁に細く長い袖石を見ると記すが、出としては片袖である。玄室袖部の耳飾1対、羨道側壁ぞいの須恵器が原位置かとされている。須恵器に時期差があり2次以上の埋葬が推測されている。

第9号古墳：今回の調査に係る。第8号古墳の北に位置することとなる。墳丘径13m高さ2.0m、西面する横穴式石室をもつ。石室は現存の長さ6.5m、復原すれば7.5～8mとなる。玄室は3.6m、幅1.7mを測る。片袖の制をとり左袖が0.47cm出る。遺物、施設から見て、奥壁ぞいに台石四石を配した1棺があり、須恵器・土師器・砥石・鉄鏃がそえられていた。袖を見る南側壁にそって1棺があり、直刀、鉄鏃、須恵器を、また北壁にそい耳飾をもつ1棺、羨道に須恵器などをもつ2棺があり、5次5人以上の埋葬が窺える。奥壁は2石からなり、袖石は幅広く長い石材を使用している。第1次葬者は副葬の須恵器から見て6世紀後葉初の時期が与えられる。

第10号古墳：第9号古墳に北接する。墳丘は径12m。南面する横穴式石室をもつ。石室は全長8m、玄室は長さ3m、幅は奥壁で1.6mを測る。片袖式の制をとり右側壁に0.25mの出をもつ袖を見る。右側壁ぞいの奥に1棺があり須恵器を若干もつ。この他、玄室右側壁前より、左側壁ぞいの前より、奥よりに各1棺の存在が考えられ4人の被葬者を推測している。奥壁は2石からなり、袖石は細く短かい石材を用いている。第1次被葬者は副葬の須恵器から見て6世紀後葉末の時間が与えられる。

第11号古墳：第10号古墳に北接する。墳丘は径7mをはかる。西面する横穴式石室をもつ。石室は現存の長さ4.18m、復原4.9m、幅は奥壁で0.9mを測る。無袖の制をとるが側壁の石材、架構に玄室と羨道の区別を見る。副葬の品などに原位置を示すものはないが耳飾りから見て2棺の存在が確められる。須恵器の示す6世紀末葉の造墓であろう。

編年 A・D	造墓 序列	被葬 者数	副 葬 品				
			土 器	装 身 具	馬 具	武 具	その他
560 565	↓	2+ 不明	壺, 埴, 坏, 平瓶等 高坏, 坏等	耳飾1対 耳飾2点	辻金具轡 —	鉄鏃 —	
560 590	↓	4+ 2	竊 埴, 平瓶, 坏等	耳飾4対・指輪 耳飾1点	金鈴 —	— 直刀	
560 590	↓	不明 2	竊, 埴, 高坏 甕, 壺, 高坏	耳飾1点	鉄片 —	鉄片 —	紡錘車
560 570	↓	2+ 2+	碗, 坏, 壺 壺, 竊, 埴, 坏	耳飾1点 耳飾2点	—	鉄鏃, 刀子	
570 580 590	↓	5 4 2	整理中				

加古川工業用水ダム—平荘湖の建設，C・S・R関連施設の建設に伴う発掘調査で得られた池尻古墳群各基の概要は以上の通りである。今回の調査に当り，平荘湖建設時の調査対象となった第1・2号古墳は水没しており僅かに第2号古墳の天井石が水面にうかぶ。第3・4号古墳は現存し，第5号は現存するものの第6・7・8号古墳は道路敷になったためか姿を見ることが出来なかった。従って5基が残存し，3基が確認されない現況である。一応，その概略を前頁に表示しておく。

2. 池尻古墳群の微地形と占地

池尻古墳群は興味ある地形に営まれている。東・北・西の3方を峻険な山に囲まれ，南にひらける地形に位置し，三方の急な傾斜面がやや落ちつき，台形の緩傾斜面となり，やがて平地になろうという傾斜変換線に占地している。詳細に検討すると，北から南へ，西から東へと低くなるが，この緩傾斜面には北から南へ伸びたかすかな尾根筋が4条，東西に並んでいることが判る。この尾根が西の尾根ほど高く，東ほど低いことは言うまでもない。尾根筋は東・西両端の尾根が幅広く中2条の幅は狭いようである。

こうした微地形と本古墳群の形成を併せ考えると注目すべき事実が浮び上ることとなる。まず，東端の幅広い尾根には第1・2号古墳が占地しており，幅広いだけに東西（やや北より）にこの2基が横ならびしているようである。この東端の尾根筋と西の尾根筋の間には谷状の凹地が北へのびることがたしかめられる。いま東端の尾根筋を第1号尾根とし順次西へ第2・3・4号尾根と呼ぶことにしよう。第2号尾根は幅狭い尾根筋である。この尾根には，第3・4号古墳が築かれている。第3号古墳は尾根筋を利用し，第4号古墳は尾根筋の高みで東に下る傾斜面を利用して存在する。第4号古墳が東に開口する理由もこの東の傾斜面の存在，第1の尾根との間の谷状の北へ伸びる凹みとの関係で生じているのであろう。第3号尾根も第2号尾根と似て幅狭い尾根筋である。第5・6号古墳が営まれているが，第5号古墳は尾根筋を利用し，第6号古墳は尾根のやや高み，東へ下る傾斜面を利用して営まれている。第6号古墳が東へ開口する理由もこうした地形から背けるところであり，よく第4号古墳と在り方が一致する。第4号尾根は西端にあり第1号尾根と似て幅広い尾根である。この尾根には，第7・8号古墳が尾根の幅の上に東西に横並びしており，第1号尾根と在り方を共通させている。ただ，この尾根の高みには，西縁の肩を利用して，第9・10・11号古墳が高みへと連なっている。東に空間地をのこしているだけに，西の谷地形にそうした連なりは第4号尾根の西縁と係る占地であると言えよう。9・11号古墳の石室が西面することもそうした占地とかわるものと言えよう。なお，未調査の2基は，1基が第2号尾根をかなり北へ登った高みにあり，1基が第3号尾根をやはりかなり登った高みにあり，第2号尾根の第3・4号古墳，第3号尾根の第5・6号古墳の接し合う在り方とは異なる別の在り方を示すものである。

池尻古墳群を構成する13基の古墳は，意味なく分布するのではなく，微地形を追う中で明確に一定のきまりをもって営まれていることが明確になってくるのである。第1号尾根には2基が左右に接し合い，第2号尾根では前後に2基が接し合い，奥に離れて1基が，また第3号尾根でも2基が前後に接し合い，奥に入り離れた1基がある。第4号尾根では左右に2基が接し合い，さらに僅かの距離をおいて3基が前後に接し合う形で存在し合っているのである。尾根と谷を絡み合せると，13基の古墳は，第1号尾根1群（第1・2号古墳），第2号尾根2群（第3・4号古墳）・（第13号古墳），第3号尾根2群（第5・6号古墳）・（第12号古墳），第4号尾根2群（第7・8号古墳）・（第9・10・11号古墳）と分別されることと

なるのである。換言すれば13基からなる池尻古墳群は大別すれば4条の尾根の示すように4群に分けられるが、詳細に検討すれば、さらに7つの小群に区分することができるのである。すなわち、4群7小群が得られることとなるのである。

いま仮りに、こうした区分を第1尾根第1群、第2尾根第1群、第2尾根第2群、第3尾根第1群、第3尾根第2群、第4尾根第1群、第4尾根第2群と呼ぶこととしよう。第1尾根第1群は、尾根筋の先端、平地に面して第1号古墳があり尾根と平地からするかぎり正面に来るのはこの古墳であり、尾根の西へ片寄りやや高味、平地からすれば奥に営まれた古墳として第2号古墳が存在する。ただ尾根幅がひろいこともありともに南面するが第1号古墳にくらべ脇で奥という場が与えられていると言える。同様なことは第2・3尾根の第1群でも言えるところである。この2つの群は、尾根の先端、平地に接した地に南面の第3・5号古墳があり、平地からみても尾根からしても正面を占めている。ところが第4・6号古墳はそれぞれの尾根が幅狭いこともあって、ともに尾根の東斜面にかかること、しかも高味に営まれ東面する石室をもっている。両者に見られる東の谷から至るか尾根の東斜面を通して至るかいずれかであろう。とすれば、平地からも尾根筋からも正面観を形成する第3・5号古墳に対し、第4・6号古墳は脇で奥の観をもつものであることが指摘できるであろう。なお、この第2・3尾根にはそれぞれ第2群として各1基が第1群から離れて高味に造られている。第1群より古いものとして成立するか、第1群の正面を占める第3・5号古墳より遅れるものとして成立するかは立地であり、奥の脇とした古墳と同様、群として第1群の奥、脇に当る地形を占めている。恐らく東面する横穴式石室と考えられるものである。第4尾根の第1群は、尾根の先端、平地に接する場を占め2基が並ぶが、これは尾根幅が広いことに基く。尾根を谷の関係からすれば第7号古墳が正面を占め、第8号古墳が東にややより緩やかな東斜面に立地したことになり脇、奥といったイメージを担うことになるのである。ところで今回調査した第9・10・11号古墳は、この第4尾根の第2群を構成する。尾根の西斜面の肩を巧みに利用して次第に高みへ連なるが、この1群は第1群の正面観を形成する第7号古墳の西奥・脇に当ることとなり、群として第1群の奥・脇のイメージをもつことになる。まず、最も下手にある第9号古墳は西面しており、第10号古墳が南面、第11号古墳が西面する横穴式石室をもつことが重要である。第9号古墳は第7号古墳の脇、奥を占めるかぎり尾根の高みとなり、従って西面といった軸をとらざるを得なくなるのである。こうして西面の軸が誕生するとこの第9号古墳を正面とし、脇、奥としたその高みに南面した第10号古墳が登場するのである。第11号古墳が西面するのも第10号古墳を正面に置いて考えた場合にその異いが起る理由も明白となるであろう。

3. 池尻古墳群の墓道復原

池尻古墳群をこのように占地から検討して来ると、尾根や谷の関連から正面をイメージする場を占める群と、脇なり奥をイメージする場を占める群のあることがまず指摘されるであろう。各尾根の先端、平地に接して所在する第1群が正面のイメージをとり、谷なり斜面を利して高味に営まれた第2群が奥脇といったイメージを漂わせる。先に墓域を占める場合、位高き者が墓域を占める場合、正面となるべき場を占めることは改めて説くまでもないであろう。従って第1群にそうした性格を与えることが可能であり、ひいては第2群に後に墓域を獲得設定したもの、位はじめは低きものが高きを得て設定する。そうした場合が想定されるのである。各尾根の第1群と第2群の間にこうした基本的な差異のある

ことがまず明白になるのである。

同様なことは、各群を構成する各古墳にもあてはめ得るであろう。第1・3・5・7・9号古墳は、いずれもその群の中で正面観を作り出すものであり占地からみても中心、正面のイメージをもつものである。一方、2・4・6・8・10・11号古墳は、いずれも占地なり横穴式石室の向きからしても脇であり、奥のイメージをもつと言える。例えば第3号古墳から東北に折れて谷をのぼり第4号古墳に至るといように、常に正面を経て、正面を観て折れて一脇へより奥へより—の表現があるように、正面のイメージに規制されているのである。墓域内に最初に尾根先の正面を占め、正面のイメージをもつ古墳が誕生し、のちその脇を経て奥に次の古墳—正面に規制された脇、奥のイメージの古墳—が営まれていくのである。この場合も先に造墓するものが正面を、あるいは位高き者が正面のイメージを握るであろうことは説くまでもないであろう。群を構成する2基の中にもこうした「正面」と「奥・脇」のイメージの差が息づくのである。

こうした正面と脇のイメージが各古墳、各群に与えられるとそれぞれの間を連繫する道墓道がよみがえってくる。かつて墓道として集落から古墳に至る間に性格によって、根道・幹道・枝道・茎道という4種の墓道を区別したことがある。茎道は、横穴式石室の羨道の前面にほぼ石室と同軸、延長として設けられる道であり古墳ごとに見られる。枝道は1～数基の古墳が共有する道であり、古墳と古墳を連繫する道である。この道は幹道から分れて生じ、茎道を分岐するものである。幹道は、1～数基なる古墳のグループを連絡する道であり、群を繋ぐものとして機能する。根道は、群のいくつかを集合させた一つのまとまりをいくつか連繫する道であり、集落から墓域に至る道として機能する道である。

集落に至る道にこうした4種の道を区別した上で池尻古墳群を見ると、微地形なり占地を通じて得られた各群の間にそれぞれの墓道が息づいている状況が浮かび上がってくる。各古墳の羨道の前に茎道のあることは、これらの石室の床面が墳丘基底よりなお一段と高いことから墳丘基底に出るまでの間の道としても存在し、また墳丘をめぐる道としても存在する。枝道は、第1尾根の第1号古墳の茎道から北西に尾根斜面を通り第2号古墳の茎道に結ぶ道であり、第2尾根では第3号の古墳の茎道から尾根東斜面を通り北西の第4号古墳の茎道に至る。第3尾根では第5号古墳の茎道から出て尾根の東斜面を通り第6号古墳の茎道を繋ぐ。第4尾根では第7号古墳の茎道を発し、尾根先も東北に回り第7号古墳の茎道へ結び、また第9号古墳の茎道を出て北東に進み第10号古墳の茎道に達し、再び北西に尾根西斜面を通じて第11号古墳の茎道をつなぐ道なのである。枝道はこのように各古墳の茎道をつなぐものとして機能するのである。

枝道でまとめられた各群を連繫するもの、それが幹道である。第1尾根第1群と第2尾根第1群、第3尾根第1群、第4尾根第1群を連繫するものとして東西に走る道を考える場合、第1・3・5・7号古墳が尾根先、平地への変換線に連なることは、この変換線が根道の位置となってくるのである。したがって第1・3・5・7号古墳を連ねる幹道が顕現することとなるのである。次に第2・3・4尾根の第1群と第2群とした二者の間にも往來の道が必要かと思える。この間の道は、第1群の枝道を延長し第2群に至る型の道と先に復原した各尾根の第1群を東西に結んで走る幹道から岐れ第2群にそれぞれたどりつく谷合なり尾根脇を利用した型の道が考えられるのであろう。第2・3尾根の場合、尾根の東斜面を利用して第3・5号古墳から第4・6号古墳への枝道が作られているが、第2群である第12・13号古墳へは遠く谷筋を道とすることの方が妥当である。第4尾根の場合第1群の枝道が東北にのびるのに対し、第2群は西北にあり枝道の延長とはならない。

したがって枝道とは別に1道を想定せねばならないであろう。恐らく各尾根の第1群を、東西に連繋した幹道と、この幹道から第2群に至るいま1つの幹道が3条たどれることとなるのである。この3条の幹道が、第1群をつなぐ幹道から岐れ出るものであり、利用してはじめて生きるものだけに後出の幹道と見做しうるであろう。

各尾根の第1群を東西に結ぶ古い1条の幹道を具体的にみると2条の根道ともいうべき道の存在が気付く。1は集落から第1尾根に至る根道であり、2は集落から第4尾根に至る根道である。ともに南から北へ、低い平地から高い山すそに至る道である。第1、第4尾根ともやや深い谷を脇にもつことに由来するのであろう。第1、4尾根とも第1群が内側に枝道をもって展開することを思えば、本古墳群に至る道は東、西両端の北への山道が根道として息づいていたろうことを推察させるのである。

集落を発した2条の根道は山道でもあったろうが、墓域の東西両端に至る。ここから東西に連繋した幹道が岐れ第1群の4基(1・3・5・7号古墳)が形成され、つづいて奥へ3条の幹道が谷を利用して設けられていく。この幹道からさらに枝道が出、ここに後続する第2・4・6・8・10・11号古墳が誕生し、墓道でつながる。そうしたあざやかな墓道の世界が復原されるのである。

4. 池尻古墳群の形成序列

墓道の復原の過程で、すでに池尻古墳群の形成過程が浮び上って来た。第1・3・5・7号古墳が早く登場し、第2・4・6・8号古墳が続く、こうした姿が枝道の形成から窺われる。また幹道の状況から、第2・3・4尾根の第2群が、第1群の第1・3・5・7号古墳より遅く形成されたことが知られる。加えて、第4尾根の第2群—今回調査した古墳—も枝道の形成過程から第9・10・11号古墳と順次営造された状況が読みとれるのである。微地形の占地、墓道の形成からこうした形成序列を得るが、こうした序列を一方、古墳自体から追求することもまた可能である。

池尻古墳群を形成する13基の古墳中、11基の内部主体が調査されていることは再三のべた。こうした内部主体—横穴式石室を検討するならば、その平面形に3種の形態が区別できる。第1は両袖式石室であり、第2は片袖式石室、第3は無袖式石室である。第1の両袖式石室には両袖とも顕著なa型と顕著でないb型が、また第2の片袖式にも袖の出の顕著なa型と少いb型に細分できるであろう。葬室と羨道を明確に区別する第1—a型が最も初源的形態であり第1—b型へと移り、順次第2—a型、第2—b型へと変遷し、やがて区別しない第3型となり、最後には小形の小石室(本古墳群には存在しない)となるのである。こうした石室の形状と変遷を考えると、第1尾根第1群は正面の第1号古墳が第1—a型、脇の第2号古墳が1—b型となり、第2尾根第1群では第3号古墳が第1—a型、脇奥の第4号古墳が第3型、第3尾根の第1群も同様正面の第5号古墳が第1—a型、脇奥の第6号古墳が第3型となる。第4尾根の第1群でも第7号古墳が第1—a型、脇の第8号古墳が第2—a型、同じ尾根の第2群、最も低い第9号古墳は第2—a型、第10号古墳は第2—b型、第11号古墳は第3型となっているのである。従って、第1尾根第1群は(1—a型)→(1—b型)、第2尾根第1群は(1—a型)→(3型)、第3尾根第1群も(1—a型)→(3型)、第4尾根第1群は(1—a型)→(2—a型)、第2群が(2—a型)→(2—b型)→(3型)へと変遷することとなるのである。

微地形の占地と墓道から復原した池尻古墳群の形成序列と、各古墳のもつ横穴式石室の形態からする形成序列は、鮮やかに吻合するのである。ここに本古墳群の形成過程は明確

になったと言えるであろう。未調査の第2・3尾根の古墳が第1—bなり第2—a・bと
いった型の横穴式石室をもつものであろうことも容易に推測されるであろう。

ところで、こうした横穴式石室の形態は、その盛行の時期が限定できるのではないかと
私は考えている。第1型は6世紀中葉に、第2型は6世紀後葉に、第3型は6世紀末葉、
第4型は7世紀初葉に編年できると考えているのである。換言すれば第1—a型に西暦
560年代前半、b型に後半、第2—a型に570年代、b型に580年代、第3型に590年代、第
4型に600年代を与えたいのである。

横穴式石室内は普通は攪乱されて遺体の埋葬状況を窺うことはむづかしい上、埋葬序列
を明きらかにする事は至難である。しかし本古墳群の場合、第9・10号古墳の奥壁ぞい、
右側壁奥よりの遺体は状況から第1次被葬者と見て誤りなく、年代も上記の編年に合致す
ることが指摘できる。

このように見てくると、560年代に造墓を見たのは第1・3・5・7号古墳の4基であ
り、第1～第4尾根の先端を占め一斉に営まれたこと、集落を出た2条の根道が山にのび
る。その間を東西につなぎ尾根先をむすむ幹道が同時に拓かれるのである。565年代
になると、第2号古墳が、570年代になると、第8号古墳が登場する。両端の群であり、
根道の末端、幹道の拠点であることが注目される。同時に、560、565年代に造墓を見な
かった第4尾根奥に、第9号古墳が誕生してくる。各尾根先端が第1～4号古墳に先取され
ているところから止むなくこの奥地を占地するのであろう。第2・3尾根の第2群もこの
ころに成立してくるのであろうか。580年代には第10号古墳の成立がある。第9号古墳に
つづく逸早い造墓である。590年代それまで560年代に1基を形成しただけで後継する古
墳を築かなかった第2・3尾根に一斉に第4・6号古墳が形成され、また第4尾根第2群
の第11号古墳が造墓されるのである。この期の造墓以降、600年以降にはこの地にはも
はや造墓の現象はとだえるのである。

このように各基、各群の形成序列に年代観を与え編年すると、第1～第4尾根の第1群
は一斉に560年代に造墓するが、継続して565年、570年代に後続墓を形成し以降造墓を
やめる第1・4尾根と、560年以後造墓せず590年代に急に造墓する第2・3尾根1群が
顕著な在り方の相違を見せ注目されるし、560年代造墓しえず止むなく尾根の奥に新しく
造墓をはじめた各尾根の第2群の中にも、第4尾根第2群のように570→580→590年代と
順次後続の墓を営む群と第2・3尾根のように1基で終焉し後続の墓を営まない群があり
やはり鮮やかな在り方の相違を示しているのである。

5. 池尻古墳群の性格

池尻古墳群の構造とその形成の序列、年次が明確になると、次に問われるのは、この古
墳群の性格である。560年代に尾根先に一斉に4基の両袖式石室墳が誕生したのち、570
年以降、尾根の奥よりに3基の古墳が登場してくる。こうして、本古墳群は7群が算えら
れることとなるのである。各群中にはさらに後続の古墳が営まれている。こうしたあり方
から、これらの群の背景となるものが「家族」という概念であり、その歴史的な流れの中
で群を生み出すことが読みとれるであろう。1基の横穴式石室内には多くの人々が葬られ
ていること、両袖式・片袖式石室の場合、例えば第3号古墳では4種の耳飾の出土があり
4人以上、第9号古墳は5人以上、第10号古墳4人の葬者が一応たしかめられているので
ある。石室の奥壁なり側壁の袖側には石室内でも最も古く最も量も多く質のすぐれた副葬
品をもつ死者があり、この死者が戸主と考えられるので、他の人々は家族員ということに

なろう。横穴式石室墳は戸主の死のたびごとに、朝廷なり国郡の承認を得て造墓され、一旦先の石室に葬られた場合でも新しい死した戸主と深い縁なりつながりをもつ者は新しい石室に再葬—改葬—移葬されるのである。各群が2基なり3基からなることは、戸主の死が2度なり3度あり、承認を得ての造墓があったことを示しているのである。

したがって、集落内の数多い家族中、えらばれた7家族のみに造墓が認められており、そのうちの4家族（各尾根第1群）のみは古くからの有力家族と見え、尾根の正面を占地するのである。以後、興起した家族の場合はすでに尾根正面を占めることが出来ず奥なり脇に墓域を設けることとなるのであるが、その場合も承認を得て次々と造墓を果す家族と後続の墓をもら得ない家族の存在することが注意されるのである。

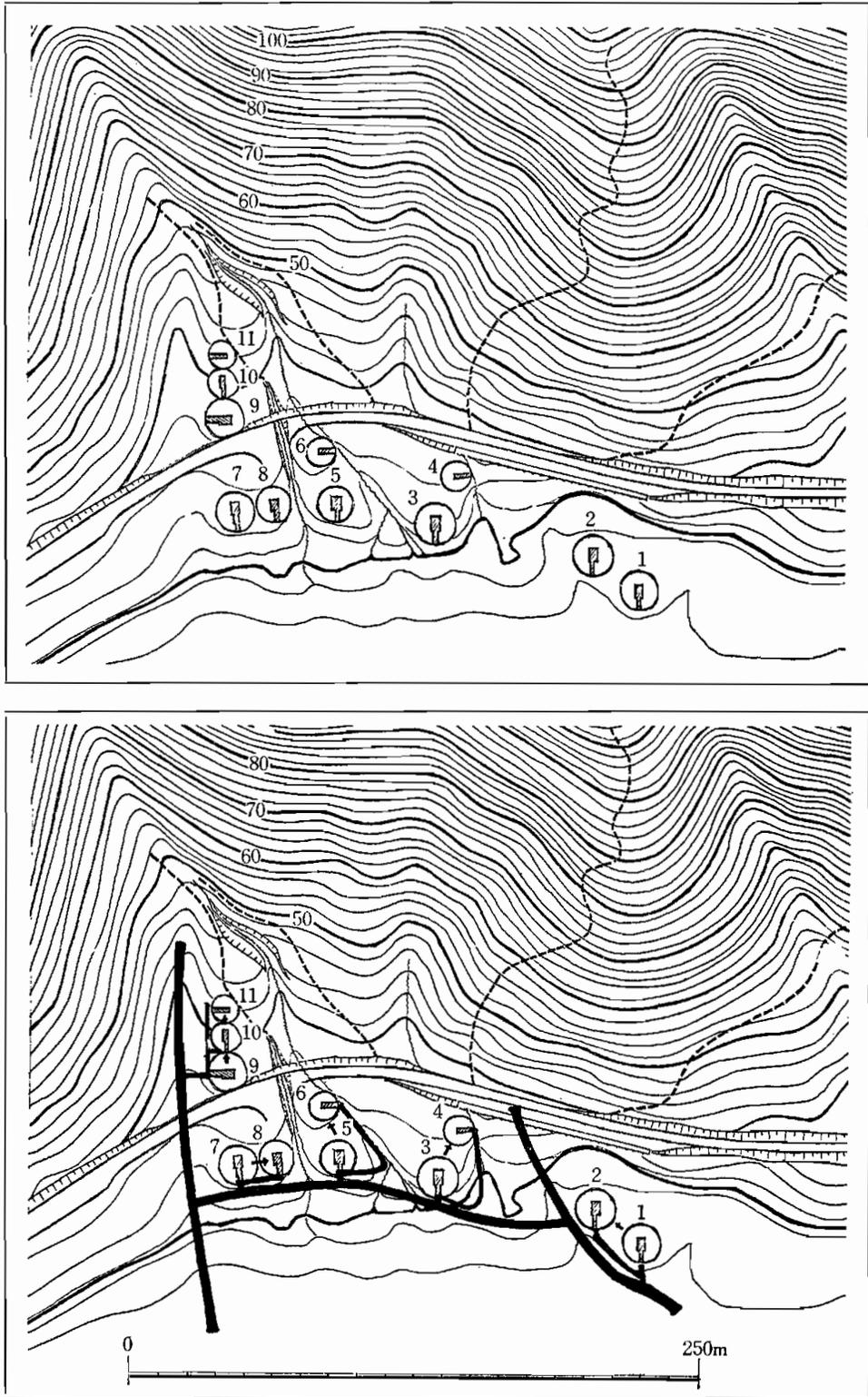
このように見てくると、後期群集墳の分析は戸籍の機能を果しうるであろう。池尻の集落内に居住した有力な家族の動向が実にダイナミックに姿を見せることになるのである。中番古墳群や雲雀山古墳群より早い段階で形成がはじまり、早く終焉している事実や、1家族の造墓が1～3基にとどまることなどは重要な特色であろうし、両袖、片袖、無袖式石室へと次第に葬る人数を減じ、夫妻のみの墳墓であろうかと思える無袖にまで至りながらも遂に7世紀初葉に登場してくる戸主1人のみの墳墓—小形堅穴式石室—の存在しない点も注目しておかねばならない事実といえるであろう。畿内中枢部の後期古墳群が6世紀の中葉に成立し6世紀末葉に終焉をとげる事実にもことによく符合を合せた成立、終焉現象を見せる本古墳群は、そうした意味でも畿内的な、政治的な遺跡と考えられるのである。

—— 昭和55年9月28日 稿了 ——

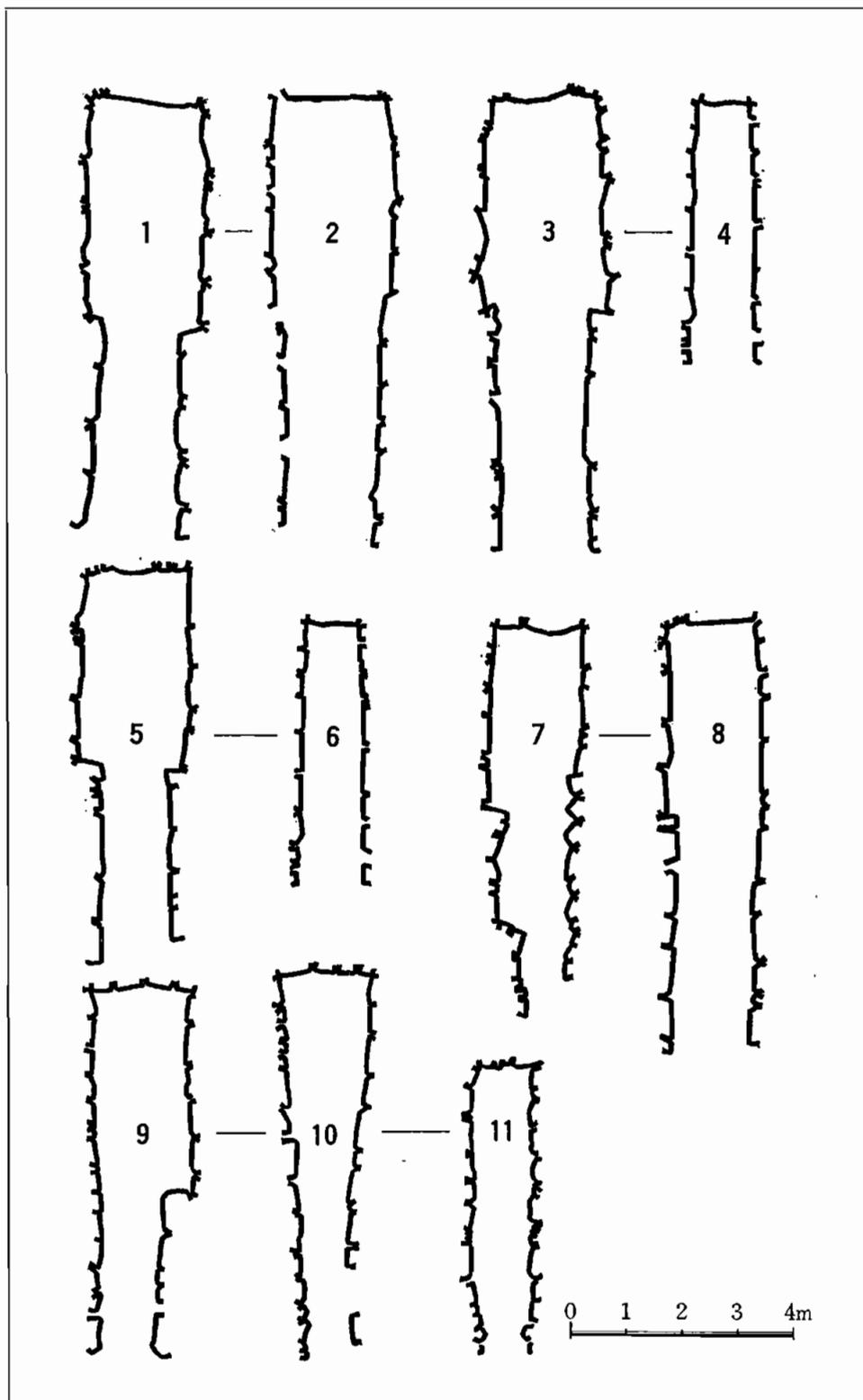
〔付記〕

1. 池尻古墳群の調査に当り、本学助手植野浩三、3回生平田博幸、山本明彦、宇治原靖泰、2回生高野学、1回生富山直人が主として調査に携り、3回生柏 拓哉、河合葉子、川村紀子、狭川真一が時にこれを助けた。
 2. 本稿と関連する私論として次の稿がある。
 - a. 「群集墳の群構造とその性格—兵庫県小野市所在東野中番地区古墳群をめぐる分析」（小野市教育委員会『高山古墳群調査報告書』昭和49年刊）
 - b. 「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」（元興寺文化財研究所『古代研究』第4号昭和49年刊）
 - c. 「倉治古墳群の群構造とその性格」（交野古文化研究会『倉治古墳群発掘調査報告書』昭和50年刊）
 - d. 「群集墳の構造とその性格」（講談社『古代史発掘』第6巻・昭和50年刊）
- なお：別に関連する調査報告書として滋賀県教育委員会刊行の『日野町小御門古墳群発掘調査概要』・『飯道塚古墳群発掘調査報告書』・『狐栗古墳群発掘調査報告書』がある。

第1図 池尻古墳群の立地と群構造・墓道



第2図 池尻古墳群の横穴式石室平面図集成



Summary

The Ikejiri tomb-group, located at Kakogawa city, Hyōgo pref., consists of 13 tombs constructed in late-6th century, among which 11 tombs have already been excavated. These tombs are classified into seven groups according to the method how to use the fin structure of the surrounding landscape, the style of the stone-chamber and the ramp (which is reproduced by inspection). Each group corresponds, in our present understanding, to the tombs of one family, and shows the history of each family. Four families in habited in the southern part of the village are considered to have formed the core of that village and the remaining three families the new-comers. From the investigation of this tomb-group. We can have many informations about the life-style of the family-members in the village in the 6-th century.